

病診連携 北都新聞から抜粋

1997年(平成9年)1月11日(土曜日)

名寄地区 6 市町村

機能回復の充実目指す

4月から
事業開始 全道でも初の試み

広域で理学療法士確保

【名寄】風連町以北中川町の六市町村では来年度から、名寄市立総合病院(久保田宏院長)の協力を得て理学療法士を共同で配置する各寄地区機能回復推進事業に取り組むことを決めた。これは、各市町村保健センター活動の重要事業の一つである脳卒中後遺症者のリハビリ業務の充実を目指す、一人分の人権費などを共同で出資し、人材を確保しようというもので、この種事業が広域事業として取り組まれるのは全道で初めて。西守市保健福祉課長は「当面は、センターが中心となるが、訪問指導も視野に入れ検討している」と話している。

市保健福祉部によると、現在、風連町、名寄市、下川町、美深町、音威子府村、中川町でそれぞれに実施されているリハビリ教室などには約百五十人が通っているが、脳卒中の後遺症者は在宅を含めればその数は三、四倍に達しているとも言われる。

脳卒中により、体の機能に障害を負った人たちは一日も早い社会復帰を目指し、各自自治体の保健センターなどで開催されるリハビリ教室に通って機能回復に努めているが、指導資格を持つ理学療法士の確保が大きな悩みとなっていた。

名寄市の場合、市立総合病院で理学療法士を採用しているため、月一回保健センターを訪れ指導してもらっているが、他の町村では札幌市内の病院に依頼して人材確保に努めている実態もある。

しかし、一自治体で理学療法士を確保するのは経費的にも、人材的にもむずかしい。名寄市立総合病院にさらに一人を採用してもらい、補充する。一人分の人件費などに

西課長は「四月の事業開始

合病院で理学療法士を採用しているため、月一回保健センターを訪れ指導してもらっているが、他の町村では札幌市内の病院に依頼して人材確保に努めている実態もある。



機能回復を目指しさまざまな試みが行われている(写真は美深のポテトクラブ)

始前に協議会を作り具体的にに対応していくこととなるが、国の方針で保健センターは各市町村一カ所設置となる。その主要事業の一つがリハビリであり、この事業展開で、より計画的なメニューを立てることも可能になるはず。また、各市町村の現状から言って、かなりの充実も期待できる」と話している。

また、当面は保健センターなど施設中心で対応することになるが、事務レベル協議では在宅の脳卒中後遺症者を対象とした訪問指導も視野に入れており、よりいっそうに充実が期待される。脳卒中により、体の機能に障害を負った人には、適切な機能回復訓練が最も重要であり、それが一日も早い社会復帰につながる。その

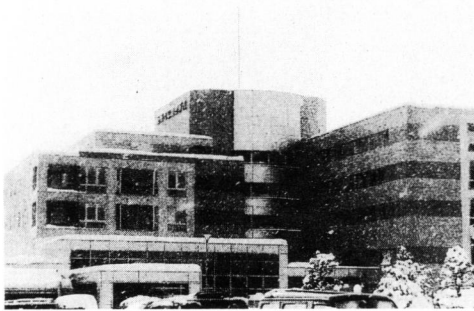
ういう意味でも今回、市立病院の理解と協力もあつて、道内初の広域事業が各寄地区で展開されることは、リハビリに努める人にとって、も朗報となりそうだ。



精神科サテライトクリニック事業

医療圏越え支援

名寄市立総合病院 ― 枝幸町国保病院



精神科サテライトクリニック事業に取り組む名寄市立総合病院

道内で3番目の実施 遠距離通院者に対応

【名寄】道は、精神科医療過疎地域における医療提供体制の充実を目的として、平成七年八月から道内で精神科サテライトクリニック事業を展開しているが、今年四月からは名寄市立総合病院（久保田宏院長）―枝幸町国保病院（三谷深泰院長）の間で同事業を展開する方針だ。これは、十勝保健所管内、函館・江差保健所管内に次いで三番目の試みで、二次医療圏を越えて支援を行う同事業の実施は、これまで時間をかけて通院していた患者にとって大きな朗報となる。

この事業は、基幹病院となる医療機関から精神科医が地域の病院または診療所に出向き、診療や投薬を行うもので、実施対象地域は「精神科医療機関がなく、役場所在地から最寄りの医療機関まで片道約一時間以上を要する町村が保健所管内に複数ある町村」となっている。

精神科医療過疎地域における医療提供体制の充実を目指す道では、七年八月から十勝保健所管内（本別町国保病院―帯広厚生病院、大江病院・道立緑ヶ丘病院）をモデルに初めて取り組み、昨年五月からは函館・江差保健所管内

（道立江差病院、恵田病院、函館渡辺病院）でも実施されていたおり、今年四月からは枝幸国保病院―名寄市立総合病院間で展開することになったもの。

石川孝雄病院事務局長によると、精神科医師の派遣は月二回、年間二十四回（一回一医師）枝幸地域ではこれまで、精神科の診療、治療を受けるためには一日かがりて名寄市に通院していただけに、患者や家族にとつて地元で診療などを受けられるのは大きな朗報となりそうだ。

活用する方針だが、十年三月には旧病棟の改築工事が終了することを受け、十年四月からは新たにサテライト施設として診療室を設置する方針が検討されているなど、同事業に対する歓迎ぶりがうかがわれる。同事業は、サテライト事業を実施する地区の保健所が調整機関となり、必要に応じて社会復帰施設なども紹介できる体制を整備している一方、道ではケア的な支援も必要であることから精神科ソーシャルワーカーの派遣を推進しており、派遣に対する補助も行っている。

道内最初のモデル地区となつた十勝保健所管内では、七年度で延べ二百九十二人が受診しており、函館・江差保健所管内でも月平均十四・九人が受診している。地域センター病院として、名寄市立総合病院では、この精神科サテライトクリニック事業がより多くの人たちに理解され、積極的に活用されることを期待している。

